

積算四方山話④

属人的な受注活動

野呂 幸一

公益社団法人日本建築積算協会 名誉会長

建築部の陣容

私が所属していた積算課は、建築部にあり、当時の建築部は、第1部から第4部までであったが、職制では第1部に所属し、他の部の仕事も担当していた。

また、建築部には事務課があり、積算課同様、各建築部の面倒を見ていた。

事務課には、課長の下に男子社員が1、2名と女子社員が数名いた。全員が事務職であり、建築部の経費や庶務を管理していた。

建築部で中心的な役割を果たすのが建築課であり、課長が10名近くいた。各課長には1名の平社員がついていたが、彼らは、“3列目”と呼ばれていた。これは部長が窓を背に座っており、その向い合に課長が座り、その後ろに平社員の席があり、部長席から数えて3列目に当たるためであった。

建築部の職員は、部長を始めほとんど全員が積算課出身であり、私たちの先輩であった。

当時、本店の積算課課員は、新入社員として配属された後、大卒は、2～3年で現場に配属となり、5～6年現場を経験すると何人かは建築課に戻ってきた。現場に配属となる時には、「下請をよく知ってこい」と言われて出された。

建築部の3列目は、積算課が作成した内訳書に値入れを行うが、その金額は下見積りを複数社から徴集して決めることが多かった。顧客に提出する見積りは、課長と相談し、部長の決済を得て行っていた。

建築部は、工事の獲得と利益の確保が使命となっており、各人が独自の工夫と努力で顧客との交渉や現場の利益管理に精を出していた。日常の業務は至極多忙で、昼間はほとんどの人たちが出払っていた。

営業部と連携

当社には営業部もあり、1、2名の部長と2、3名の課長がいたが、全員が事務職であり、建築部と連携して活動していた。しかし、工事に関しては実権がなく、建築部からの指示で動いていた。

営業課長は、時々積算課の課員を伴って営業活動をすることがあった。これは顧客が要望する工事内容や設計図に対し、建築の専門家としてアドバイスをを行うためである。

私も2、3度、営業課長にお供したが、入社して1年ぐらいで経験の浅い未熟者の私が呼ばれて行く場合は、先輩が行くような顧客ではなかった。

私が連れて行かれた先は、怪しげなキャバレーやラブホテルの経営者で、彼らは背広を着てネクタイを締めてはいたが、普通の会社員とは違った雰囲気を持っていた。仕事の内容は、内外装の改修工事などの相談が多かった。

当時大阪の繁華街には、大小様々なキャバレーがあり、私も先輩に連れられて行くことが度々あった。店内はファンタジックな光に照らされ、派手な衣装を纏ったホステス達に囲まれて楽しかった。しかし打合せで昼間訪れるキャバレーは、夜とは全く違っており、ガランとして薄暗かった。目が慣れてよく見ると壁や床はものすごく汚く、あっちこちにゴミが落ちており、異様な匂いもしていた。夜と昼ではこんなに違うのかと半ば感心させられた。

またラブホテルにも連れて行かれたが、ある経営者は、ラブホテルでかなり儲けたのでこれからはビジネスホテルにしたいがどうしたらいいかなどと聞いてきた。

自分の会社は、こんな建物もやるのかと驚いたが、営業課長は丁寧に対応していた。私は、顧客の前ではいかにも専門家としていなければならず、専門的な話で手に負えない場合は、「会社に持ち帰って検討します」と言ってその場を逃れた。このような場合は、帰社後、先輩に相談し、結果を営業課長に伝えた。

力関係で決まる工事費

建築部に新任の課長がやってきた。この人は、元軍人で戦場では鬼軍曹として恐れられていたとのことだった。背はあまり高くないが、体は全身筋肉の塊で、きびきびしていた。

新任早々であったが、いきなり大きな指名競争物件の獲得に乗り出した。この工事は、総合スポーツ施設であり、広大な敷地に体育館やプール、更に陸上競技用のトラックなどがあった。また受注額も大きく、指名を受けた各社は、何としても獲得したいと意欲を燃やしていた。

新任の課長は、建屋毎に積算が終わると、積算課の隅にある打合せ机に座り、関係する下請を次々に呼んだ。下請には既に下見積りをするよう指示しており、その金額を聞き始めたが、その勢いは凄まじく、下請を睨み軍隊調の言い方で値切っていた。声が大きいので近くに座っていた私にもよく聞こえたが、金額は、受注したらその下請に発注するからと言い、半値にするよう迫っていた。下請は、その勢いに押されたのか、半値でも工事が欲しかったのか、ほとんどが「分かりました」と答え了解して帰っていった。

この工事は、低価格で入札したこともあり、当社が落札した。その後、工事が始まったが、下請と契約する工事金額は、力関係で決められ、下請はかなり努力を強いられたようである。

旅館に陣取って仕事

ある朝、出勤したばかりの私は課長に呼ばれ、会社の近くにある旅館へ行くように言われた。

「えっ、何をされるんですか」と聞くと「行けばい

い。早く行け」と言う。

私は何が何だか分からなかったが、急いで教えられた旅館に行った。旅館は、古ぼけた木造2階建てで小さな玄関があった。

恐る恐る入ると、やや年配の女中が出てきて上がるように言われ、奥の和室に連れて行かれた。女中が襖越しに私に来たことを告げると、中から太い声がして、「電話番号をするよう言ってくれ」という返事があった。

私の居る前室には壁際に小机があり、黒い電話機が置かれていた。また机の前には座布団が一つあり、ここに座って電話番号をすればいいことが分かった。

座るとすぐに電話が鳴った。名前を告げられ、中にいる人を呼び出してくれという。そこで大きな声で襖越しに電話がかかってきたことを告げた。すると襖が開き、浴衣姿の当社社員が出てきて電話をとった。

その時、和室の中が見えたが、部屋の中央に大きな座卓があり、図面や書類が所狭しと置いてあった。また座卓を囲んで2、3人の男が、胡坐をかいて座っていたが、みんな浴衣を着ていた。どうやらこの旅館に泊まり込んでいるようであり、着ている浴衣は寝間着であった。

電話番号で中の人を呼び出すのは簡単であったが、逆にこちらから電話をかけて他社の人を呼び出すよう頼まれた時には手間がかかった。もらった名刺の番号に電話をかけてもほとんどの人が外出しており、すぐには連絡がとれなかった。今なら、携帯電話ですぐ話すことができるが、当時は、電話をかけても話ができるまでには時間が必要だった。午後も電話番号で忙しくしていたが、5時を過ぎた頃、襖の中から「タクシーを呼んでくれ」と言われ、タクシー会社に電話をした。

タクシーが旅館に着いたことを伝えると襖が開いて全員が出てきた。ビックリしたのは、全員がピシッとスーツに着替えていたことである。これから顧客の接待に向かうようであり、タクシーに乗って夜の街に消えて行った。

当時は、旅館が仕事場となることもあり、家に帰らずに仕事をするのが当たり前という状態だった。